ダブルベッド

中山千夏

ダブルベッド

一九八〇年五月一日　初版発行
一九八〇年五月二十日　三刷発行

著者　中山千夏
発行者　矢崎泰久
発行所　株式会社　話の特集
東京都渋谷区神宮前四―三〇―六
電話　〇三（四〇五）〇八一〇
印刷　株式会社　三精印刷所
製本　株式会社　徳住製本所
© 1980 Chinatsu Nakayama
〈検印略〉落丁本、乱丁本は本社にてお取替えします。

ダブルベッド

中山千夏

ダブルベッド

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

さがしもの　7
地図のそと　21
肉桂の部屋　57
悪妻の祈り　95
ダブルベッド　137
屈辱　179

装幀＝落田洋子

さがしもの

まえがきにかえて

イラストレーション＝瀬本唯人

時計を見ると、三時を少し過ぎたところでした。

――五時まであと二時間か。

せかせかした気分でそう考えたとたん、私は大変なことを思い出しました。

急いでパジャマを脱ぎました。急いでズボンをはきました。急いでシャツをかぶりました。そして急いでドアを開け、エレベーターのボタンを押そうとしましたが、すぐに気を変えて、アパートの階段を、とんとんと降りてゆきました。

私の足取りは、とても軽やかです。まるで、いつもいつも歩いている人のようです。私はすっかり満足して階段を降りきると、アパートの前のせまい道を右におれ、最近できたブティックとハンバーガーの店の間から、通りへ出ました。

通りは大変な賑わいでした。不思議な文字や絵を色とりどりに描きつけたテントやウインドウや看板の間に、たくさんの人間たちがひしめいています。その人たちも、色とりどりです。私は、小さい時にお客さまから頂いた、チョコレートの箱を思い出しました。

リボンをといてふたをあけると、ちょうどこの通りの人たちみたいに色とりどりな紙にくるまれたチョコレートがたくさん並んでいました。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

でも、チョコレートはじっとしていましたけれど、通りの人たちは動いていました。それも、ずいぶん奇妙な動き方です。全体を見ると、色とりどりのじっとしたかたまりに見えるのに、ひとりひとりをよく見ると、たしかに動いているのです。

私は、軽い足取りにまかせて、その人たちの間を歩いてゆきました。

完全にお化粧した女の子が、つんとあごを上げて、ブティックの中へ吸い込まれてゆきます。高い靴をはいた男の子が、路端に広げた黒いビロードの布の上に、どこの店でも手に入る手造りのブローチやイヤリングをのろのろと並べています。赤い乗用車に背をもたせかけた三人の男の子と、カフェ・テラスのガラスのむこうに座っている女の子とが、何も見ていないようなビー玉に似た目で、私の姿を追いました。

そういえば、この通りの人たちの目は、どれもこれもビー玉みたいです。

腕を組んで語り合いながら歩いている恋人たちの目も、横断歩道の赤信号にせき止められている人たちの目も、カー・ラジオから流れ出す、破けた音楽に合わせてステップを踏んでいる人たちの目も。

——ビー玉ならここでたくさん手に入りそうだけど、これじゃあない。

私には、すぐ、そうとわかって、ますますさっさと人々の間を歩いてゆきました。

歩きながら私は、これはちょっと困ったことになったのかもしれないな、と思いました。

さっき部屋の中で時計を見たら、三時を少し過ぎたところだったのです。そこで私は、

——五時まであと二時間か。

と考えたのですが、せかせかした気分でそう考えたところをみると、何かさしせまった仕事の最中だったに違いありません。

そのとたん、私は大変なことを思い出してしまって、急いで部屋をとび出したのでした。何を置いても、それを探し出さなければならないということを、私は、はたと思い出したのです。だから、こうして歩いているのです。

ところが、何を置いても探さなければならないそれというのは一体なんなのか、ということになると、さっぱり見当がつかないのです。

これは、やはり、ちょっと困ったことなのではないでしょうか。

でも、そう絶望的な話でもないという気もします。どうやら、これはそれではない、ということだけは、私にわかるようなのです。

通りにいっぱいあるビー玉は、それではない、ということが、私にはわかりました。もちろん実はこれがそれかもしれないし、これがそれじゃない、という証拠は何ひとつありません。

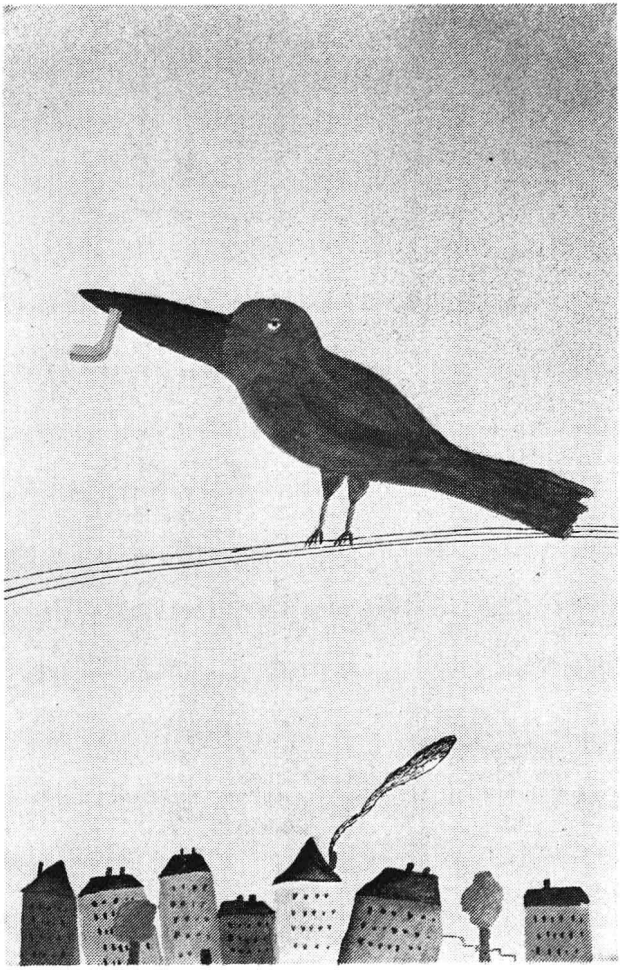
でも、私ははっきりとそれじゃない、と思ったのです。それに、もしこれがそれだったとしたら、それを探し出すことのできなかった場合より、もっと私はがっかりしてしまうでしょう。

――これがそれじゃなくてよかった。

ほっとしながら、私は歩き続けました。

足取りは、ますます軽やかです。賑やかな通りを抜けきろうとするあたりの並木に、黒いポスターが貼りつけられていました。一枚きりではありません。並木ごとに、どこまでも、どこまでも黒いポスターは続いていました。歩きながら見ていると、それはゆっくりまわる映画のフィルムのように、私の目の中で続いてゆきます。

白い人間の顔がいくつかありました。コンサートの文字もありました。入場料、一五〇〇円という文字もありました。



白い人間たちの顔は、怒ったような悲しいような表情をしていて、私の興味をひきました。

——でも、これはそれじゃない。

そうわかった私は、ポスターから目をはずして、歩き続けます。

空色の大きなゴミバケツの影から、ふいに何者かがバサバサと飛びたって、頭上の電線にとまりました。くちばしも目も羽根も大きなカラスです。そのくちばしの間に、パンのみみをくわえて、カラスは首をかしげました。寝ぐせのついた髪の毛のように、頭の羽根が立っています。カラスは私に何か尋ねたいようでもあります。

——でも、これはそれじゃない。

私は、さっさと通り過ぎました。うしろで、また羽音がしました。きっと、カラスがもう一度、バケツをあさりに降りたのでしょう。

ベレーをかぶったおじいさんが、小さな犬といっしょにやって来ました。犬は、せわしなくおじいさんの足もとにまつわり、ビルの角にオシッコをひっかけ、私を見てかん高く二、三度ほえました。おじいさんが、私を見ずに小声で何か言うと、犬はいちおうほえる

のはやめましたが、まだ、米粒のような歯をむいています。

——これもそれじゃない。

私は、おじいさんにも小さな犬にもあいさつしないで、すれ違ってゆきました。

足取りは、まだまだ軽やかです。

コンクリートの割れ目から生え出している、緑の草が私の目をひきました。道路の表面に、少しばかりの葉をはりつかせて、しかも近付いてみると、黄色いちっぽけな花さえつけているのです。

うんしょ、うんしょ、という声が葉の陰から聞こえたように思いました。どうだ、どんなもんだ、という声が花の中から聞こえたように思いました。

——でも、これはそれじゃない。

私は、草をまたいで歩いてゆきました。

空の中を、胴の太いヘリコプターがもっともらしいようすで、横切ってゆきました。建設中のビルの壁には、きれいな絵としゃれた文句を書いたテントが掛かっていました。

——これもそれじゃない。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.